

スペンサー本『咸陽宮絵巻』の成立をめぐる

——『張良絵巻』との比較を中心に

向 偉

『咸陽宮絵巻』は戦国時代の荊軻という燕太子丹の臣下が始皇帝の暗殺を企て、失敗に終わるまでの顛末を描く絵巻である。現存七種の諸本が紹介され、二つの系統に大別される。従来の研究では主に冒頭部の咸陽宮威容に注目し、その威容の文学表現と絵画描写をめぐる考察されてきた⁽¹⁾。けれども、『咸陽宮絵巻』の全体像を明らかにするためには、後巻への考察が不可欠だと思われる。上巻に限ると、諸本はほぼ同じ内容であるが、下巻はそれぞれ個性を持つ。特に、スペンサー本の上巻は暗殺計画を描くが、下巻は急に他本にも見えない項羽の咸陽宮炎上と劉邦の天下統一に転じ、かなり異なった様相を呈す。スペンサー本の上下巻の内容不統一問題について、伊井春樹氏は、本来中巻に相当する部分がかつて存在したが散佚し、もとは三巻ないし四巻仕立てであったと指摘した⁽²⁾。スペンサー本の外題「かんやうきう 上(下)」から考えると、四巻仕立てではなく、三巻仕立て、即ち「かんやうきう 中」の存在する可能性が高いとは言えよう。石川透氏が永青文庫蔵『太平記』反故紙を調査した時、第十八帖裏表紙の大片に「かんやうきう三巻 百九十式刃」⁽³⁾が書いてあると指摘した。これも三巻本『咸陽宮絵巻』の存在する傍証と見なしても良いではないかと思う。

調べた限りでは、スペンサー本『咸陽宮絵巻』の下巻は御伽草子系『張良絵巻』下巻の展開とほぼ同じであることが分かった。画風も京都大学本『張良絵巻』⁽⁴⁾とよく類似していると考えられる。そのため、スペンサー本『咸陽宮絵巻』の成立を明らかにするには、『張良絵巻』との比較が必要だと思われる。本発表は書跡、画風、内容等の角度から比較し、スペンサー本『咸陽宮絵巻』がほかの『張良絵巻』と入れ替わったという錯簡の可能性、或いはスペンサー本『咸陽宮絵巻』は本来『張良絵巻』の上巻に相当する部分を含めていたという三巻仕立ての仮説を考察する。

(1) 例えば、中本大「『咸陽宮』絵巻攷—冒頭部の漢籍利用を中心に—」(『語文』60号、1993年5月)、近本謙介「『咸陽宮』絵巻伝本における物語化の方法—その記述と素材—」(『語文』60号、1993年5月)。

(2) 伊井春樹「『咸陽宮絵巻』の諸本とその性格」(『国語と国文学』69-4号、1992年4月)、29頁。

(3) 石川透『奈良絵本・絵巻の生成』(三弥井書店、2003年、273頁)。

(4) この絵巻の題箋は「漢楚軍談」と書いてあるが、内容は『張良絵巻』に属する。柳沢昌紀「奈良絵本『張良』解題・翻刻」(『中京大学文学部紀要』42-2号、2008年3月)に詳しい。

A Study of the Formation of the Spencer Collection *Kan'yō-kyū emaki*: Focusing on Comparison with *Chōryō emaki*

Xiang Wei

In general, *Kan'yō-kyū emaki* is a two-volume scroll that depicts the story of Kei Ka, a vassal of the Prince of the State of Yan during the Warring States Period who attempted to assassinate Shi-kōtei (first emperor of unified China), up to his ultimate failure. Today so far seven versions of *Kan'yō-kyū emaki* have been introduced and can be roughly divided into two lineages. Previous research has mainly paid attention to the magnificent palace called Kan'yō-kyū (1), which is depicted vividly at the beginning of the first volume. However, in order to clarify the entirety of *Kan'yō-kyū emaki*, it seems necessary to investigate the latter volume as well. Although the seven versions of *Kan'yō-kyū emaki* share almost the same content for the first volume, the latter volume of the Spencer Collection's *Kan'yō-kyū emaki* turns into a completely different story, one about the fighting between Kō U and Ryū Hō. Regarding the issue of inconsistency in the content of the Spencer Collection *Kan'yō-kyū emaki*, Professor Ii Haruki has pointed out that perhaps as originally made it consisted of three or four volumes (2). Both certain features of the scroll's external title slips, as well as discoveries made in the course of Professor Ishikawa's study of the *Taiheiki* at the Eisei Bunko Museum (3), indicate the high probability of a three-volume scroll version.

As far as I am concerned, the last volume of the Spencer Collection *Kan'yō-kyū emaki* is very similar to *Chōryō emaki*, especially the version housed at Kyoto University (4). Therefore, when it comes to the formation of the Spencer Collection *Kan'yō-kyū emaki*, it is necessary to compare it with *Chōryō emaki*. This essay will discuss the relationship between the two works from the perspectives of both text and image.

- (1) For example, Nakamoto Dai, "Kan'yō-kyū emaki-kō: bōtōbu no kanseki riyō wo chūshin ni," *Gobun* 60 (May 1993). Also Chikamoto Kensuke, "Kan'yō-kyū emaki denpon ni okeru monogatari-ka no hōhō: sono kijutsu to sozai," *Gobun* 60 (May 1993).
- (2) Ii Haruki. "Kanyō-kyū emaki no shohon to sono seikaku." *Kokugo to kokubungaku* 69-4 (April 1992), p. 29.
- (3) Ishikawa Tōru. *Nara ehon, emaki no seisei* (Miyai Shoten, 2003), p. 273.
- (4) Although the title of this version is *Kanso gundan*, it also belongs to *Chōryō emaki* due to it being the same content. See Yanagisawa Masaki, "Nara ehon Chōryō kaidai, honkoku," *Chūkyō daigaku bungaku-bu kiyō* 42-2 (March 2008).

スペイン本『咸陽宮』絵巻の成立をめぐる

一 『張良』絵巻との比較を中心に

向偉（北京大学 博士後期課程）

一、スペイン本『咸陽宮』上下巻の不一致

奈良絵本絵巻『咸陽宮』は人質としての燕太子丹が秦から帰国した後、荊軻という臣下とともに始皇帝の暗殺を企て、失敗に終わるまでの顛末を描く。その内容は『史記』を原典として『和漢朗詠集』の注釈、『平家物語』、『源平盛衰記』、『三国伝記』平仮名本、『太平記』等、いわゆる「中世史記」に取り込まれた咸陽宮説話を素材とすることは既に黒田彰氏などの詳しい論考によって指摘された⁽¹⁾。伊井春樹氏はかつて六種の伝本を整理した上で、二つの系統に大別した。近年、國學院本と国文研本が紹介され、現存八種の伝本は次のように示される。

奈良絵本絵巻『咸陽宮』諸本一覽（括弧内は略称）

「第一系統」

- | | |
|----------------------|------|
| 専修寺蔵大型絵巻（専修寺本） | 二軸 |
| 穂久邇文庫蔵大型絵巻（穂久邇本） | 二軸 |
| 大阪青山短期大学蔵大型絵巻（青山短大本） | 二軸 |
| 国文学研究資料館蔵大型絵本（国文研本） | 袋綴二冊 |

「第二系統」

- | | |
|---------------------------|--------|
| 二松学舎大学蔵大型絵巻（二松学舎本） | 二軸 |
| スペインサードレクション蔵大型（スペインサード本） | 二軸 |
| 信多純一氏蔵大型絵巻（個人蔵） | 一軸（上巻） |
| 國學院大學図書館蔵大型絵巻（國學院本） | 二軸 |

国文研本を除き、いずれも天地三十センチ前後の大型絵巻で、料紙は厚手鳥の子、金泥による下絵描、挿絵は伝本によって異なるものの、一一から一六場面を収める⁽²⁾。

奈良絵本絵巻『咸陽宮』に対して、従来の研究では主に冒頭部の咸陽宮威容に注目し、その威容の文学表現と絵画描写をめぐって考察されてきた⁽³⁾。しかしながら、『咸陽宮絵巻』の全体像を明らかにするためには、後巻への考察も不可欠だと思われる。上巻に限ると、諸本はほぼ同内容であるが、下巻は各々個性を持つ。特に、スペインサード本の上巻は太子丹の始皇帝を暗殺する計画を描くが、下巻は急に他本にも見えない項羽の咸陽宮炎上と三世皇帝（子嬰）死後の天下争いに転じる。この問題に最初に触れたのは松田存氏である⁽⁴⁾。そして、伊井春樹氏は本来中巻に相当する部分がかつて存在したが散佚し、もとは三巻ないし四巻仕立てであったと指摘した⁽⁵⁾。

伊井春樹氏の仮説が示唆的であり、さらに詳しく検討される必要があると思われる。まず、スペイン本の円熟の筆致が上下巻に変わらないため、スペイン本が別の絵巻と部分的に入れ替わった可能性は低い。外題の筆跡も詞書と一致しているので、制作時既に「かんやうきう上

（下）」と名付けられたのであろう。したがって、「かんやうきう中」の存在する可能性が高い。

なお、石川透氏が永青文庫蔵『太平記』反故紙を調査した時、第十八帖裏表紙の大片に「かんやうきう三巻 百九十式匆」⁽⁶⁾が書いてあると指摘した。現存する『咸陽宮』の作品は謡曲、御

伽草子と古浄瑠璃の三種類である。古浄瑠璃『咸陽宮』（太夫不明、江戸もすや板、『珍書大観・金平本全集一四』所収）は明暦三年（一六五七）に刊行された一冊のようである。それゆえ、この反故紙も三巻仕立ての『咸陽宮』絵巻がかつて存在した傍証と見なしても良いではないか。それに、スペンサー本『咸陽宮』を除き、現存奈良絵本絵巻『咸陽宮』の伝本は全て首尾一貫の二巻であるため、この反故紙も三巻仕立てのペンサー本『咸陽宮』を指す可能性が高いと思われる。スペンサー本『咸陽宮』絵巻は一九六〇年に反町茂雄氏の手を経てニューヨーク公共図書館に購入されたようである⁽⁷⁾。この絵巻は漢字が比較的多く、読み仮名も丁寧に付されている。調べた限りでは、仮名遣い、ルビなどを除き、上巻の詞書は二松学舎本と同文関係と言っても過言ではない。五枚の挿絵も類似している。その一方、漢楚の争いを記したスペンサー本『咸陽宮』下巻は実際に別の作品――奈良絵本絵巻『張良』と同じ内容を持つことを強調したいと思う。

二、御伽草子系『張良』絵巻との比較

黒田彰氏、柳沢昌紀氏の研究によると、現存する奈良絵本絵巻『張良』は謡曲系、幸若舞系及び御伽草子系という三種類がある⁽⁸⁾。謡曲系、幸若舞系『張良』は一巻仕立てであり、子房取履譚に集中し、スペンサー本『咸陽宮』と共通する内容はほぼ見られない。御伽草子系『張良』は主人公の張良が始皇帝の暗殺を企て、黄石公から兵書を授かり、そして沛公の謀士として楚漢戦争で大活躍したなどの説話を集めた一代記である。現在まで知られる伝本については、先行研究を踏まえて次のように整理する。

御伽草子系『張良』諸本一覧（括弧内は略称）

「第一系統」

スペンサーコレクション蔵大型絵巻（スペンサー本） 二軸

「第二系統」

学習院大学蔵大型絵巻（学習院本） 二軸

國學院大学蔵大型絵巻（國學院本） 二軸

中京大学蔵特大縦型絵本（中京本） 袋綴合一冊

大阪大谷大学蔵特大縦型絵本（大谷本） 袋綴二冊

京都大学蔵小絵巻（京大本） 二軸

奈良絵本絵巻『張良』第一系統、即ちスペンサー本だけは特殊である一方、第二系統の諸本は校合できるぐらい同じ本文を有する。調べた限りでは、スペンサー本『咸陽宮』下巻の詞書も画風も京大本『張良』の下巻に比較的近いと考えられる。同筆ではないものの、漢字が比較的多く、読み仮名が付される点では同じである。スペンサー本『咸陽宮』と京大本『張良』の下巻はそれぞれ四枚と五枚の挿絵がある。しかしながら、スペンサー本『咸陽宮』下巻約第十三紙の終わりにちらし書きがあり、元来もう一枚の挿絵が続いたと推測できる。京大本『張良』を参照すれば、この散佚した場面は盛り上がった鴻門の会を描いたかもしれない。

以上のように、スペンサー本『咸陽宮』は二松学舎本『咸陽宮』の上巻と京大本『張良』の下巻と比較的近い内容と挿絵を持つ。では、スペンサー本『咸陽宮』の散佚した部分はもともと二松学舎本『咸陽宮』の下巻と京大本『張良』の上巻に相当する二巻から成り立ったのか。

二、長大な元スペンサー本『咸陽宮』の可能性

スペンサー本『咸陽宮』散逸した内容を推測するには、まず二松学舎本『咸陽宮』の末尾と京大本『張良』の冒頭から考察する必要がある。

(前略) それ(高漸離の鉛を入れた筑)もうちはつしてころされぬ。只天うんのつよき始皇帝のくわほうのほとこそめてたけれ。(二松学舎本『咸陽宮』末尾)

それ四かいをおさめて、天下に良将の名をほとこそす事は、かならずしも心たけく、力人にすくれたるをもつてせず。(後略)(京大本『張良』冒頭)

二松学舎本『咸陽宮』下巻は荊軻の友人高漸離が始皇帝への復讐の失敗をもって終わる。京大本『張良』の上巻は儒教的教訓から始まり、良将の典型例として張良を挙げ、漢楚の争いを述べる。両作品の首尾はそれぞれ独立し、直接に繋がらないと思われる。即ち、そのまま二巻の二松学舎本『咸陽宮』と二巻の京大本『張良』に相当する内容から成り立った四巻仕立ての長大な元スペンサー本『咸陽宮』は想像し難いと言えよう。無論、スペンサー本『咸陽宮』の散佚した部分は二松学舎本『咸陽宮』下巻と京大本『張良』上巻に相当する内容を選択し、一卷に組み直す可能性はある。

スペンサー本『咸陽宮』上巻は始皇帝が暗殺を逃れたと述べ、下巻は項羽が三世皇帝子嬰を殺したことを言及したので、中巻相当部分には少なくとも始皇帝の崩御、二世皇帝の運命などの記事が組み込まれたことは必要であろう。調べた限り、現存『咸陽宮』『張良』絵本絵巻には、以上の記事を含めたものはスペンサー本『張良』しかないようである。

スペンサー本『張良』では、始皇帝が徐福を蓬萊に遣わし、そして道を妨げた龍神を射殺した後、間も無く沙丘という所で崩御した。大臣の趙高は太子扶蘇を殺し、胡亥を即位させた。専修寺本などの第一系統『咸陽宮』は徐福が大海に漕ぎ出す叙述まで共通するが、始皇帝の死去等言及せず、祝言性をもつて締め括る。また、二松学舎本をはじめとする第二系統『咸陽宮』も、京大本などの第二系統『張良』も徐福譚を挿入せず、それぞれ燕太子丹または張良の物語に集中している。こうしてみれば、スペンサー本『張良』は他本に見られない始皇帝の泰山臨幸、龍神射殺、趙高の奢りと二世の即位、咸陽宮の威容など秦漢間の記事を網羅し、簡潔に語っている。柳沢昌紀氏の言った通り、多くの逸話を挿入したスペンサー本『張良』はまとまりがやや弱く、第二系統『張良』諸本より古態を示している⁽⁹⁾。

スペンサー本『張良』の存在は重要であり、三巻仕立ての元スペンサー本『咸陽宮』を想定させる。スペンサー本『咸陽宮』の中巻に相当する部分は少なくとも太子丹暗殺計画の失敗(『咸陽宮』他本に言及)、始皇帝の崩御と二世の即位(スペンサー本『張良』だけにある)、反秦の旗を挙げた項羽と劉邦の紹介(『張良』諸本にもある)という二つの要素を一卷に組み直したと推測できよう。現段階では新資料の紹介を期待しながら、奈良絵本絵巻『咸陽宮』と『張良』の緊密な

関係を検討してきた。

〔付記〕 スペンサー本『咸陽宮』『張良』の写真をご提示くださった小峯和明先生に深謝申し上げます。

〔注〕

- (1) 黒田彰『中世説話の文学史的環境』（和泉書院、一九八七年）。
- (2) 伊井春樹「『咸陽宮絵巻』の諸本とその性格」（『国語と国文学』第六九巻第四号、一九九二年四月）、一七頁。なお、針本正行、山本岳史「國學院大學図書館所蔵『咸陽宮』の解題と翻刻」（『國學院大學校史・学術資産研究』第六号、二〇一四年三月）は新資料の國學院本を第二系統に分類した。国文研本（データセット DOI : 10.20730/200016472）は二冊の絵本であるが、専修寺本と比較的近い内容と挿絵を持つので、小稿は第一系統に分類する。
- (3) 例えば、一九九三年五月『語文』第六〇号に掲載された伊井春樹「咸陽宮の威容―『咸陽宮』絵巻と説話の世界―」、中本大「『咸陽宮』絵巻攷―冒頭部の漢籍利用を中心に―」及び近本謙介「『咸陽宮』絵巻伝本における物語化の方法―その記述と素材―」。
- (4) 松田存「翻刻スペンサー・コレクション「かんやう宮」（上・下二巻）」（『二松学舎大学東洋学研究所集刊』第二一号、一九九一年三月）、三九頁。この論文のほかに、二松学舎本と穂久邇本『咸陽宮』、及びスペンサー本『張良』に関する数篇の論文も松田存『奈良絵本絵巻抄』（新典社、二〇一五年）に収める。
- (5) 伊井春樹「『咸陽宮絵巻』の諸本とその性格」（『国語と国文学』第六九巻第四号、一九九二年四月）、一九頁。
- (6) 石川透『奈良絵本・絵巻の生成』（三弥井書店、二〇〇三年）、二七三頁。
- (7) 「Spencer Coll. Japanese MS.109. 1660-1670. Kanyo-kyu. "The Palace called Kanyo-kyu". A story of wars and warriors of China. A typical Nara-e-bon production. Nara, about 1660-1670. 2 scrolls, in laquer case. Purchase: Sorimachi, Tokyo, 1960. \$152.60.」とごう展示資料による。
- (8) 京大本『張良』（請求記号 8-44/カ/2 貴別）の題箋は「漢楚軍談」と書いてあるが、内容は『張良』第二系統に属する。柳沢昌紀「奈良絵本『張良』解題・翻刻」（『中京大学文学部紀要』第四二巻二号、二〇〇八年三月）、高山尚子「大阪大谷大学蔵奈良絵本『張良』翻刻ならびに國學院大學蔵絵巻『張良』一部校異」（『立正大学国語国文』第四八号、二〇〇九年三月）など参照。なお、謡曲系『張良』についての研究は小林健二「『張良』絵巻における絵画化の方法」（『描かれた能楽・芸能と絵画が織りなす文化史』所収、吉川弘文館、二〇一九年）に詳しい。
- (9) 柳沢昌紀「奈良絵本『張良』解題・翻刻」（『中京大学文学部紀要』第四二巻二号、二〇〇八年三月）、七五頁。